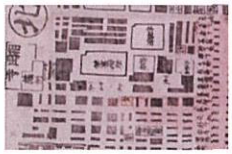
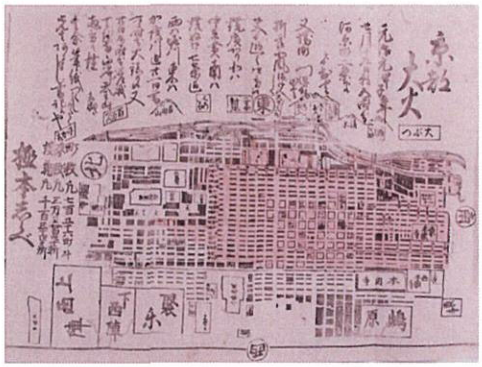
蛤御門の変と京都炎上

幕末京都と東本願寺



元治元年の「京都大火図」



「京都大火図」が伝えた記事

京都大火
元治元甲子年（一八六四）
七月十九日朝、五ツ時分、
河原町二条下ル一
ゝ方出火、
又堺町門辺よりも出火、
折節北風はげしく、
夫より追々四方え
焼広がり、北ハ
中立売、南ハ
焼ぬけ七条迄、
西ハ堀川、東ハ
加茂川迄、廿一日暮
六ツ時分、火鎮り候、又
二十日九ツ時分、嵯峨
天龍寺、山崎天王山、
両方共焼一ゝ相成候、
其余筆紙つくしがたく、
先はあらまし書記ス也、
町数、凡七百五十六町計
家数、凡三万〇二百四十軒
焼蔵、凡千百三十四ケ所
極本しらべ

蛤御門の変の前史

対外問題
　安政五年（1858）、井伊直弼が日米修好通商条約に調印。
国内問題
　将軍継嗣問題（一橋派：慶喜 vs 南紀派：慶福）
　安政の大獄　（条約調印への非難に対する処罰）
　桜田門外の変（万延元（1860）年3月、直弼が暗殺）

⇩

朝幕融和＝公武合体派
VS
条約破棄・鎖国復帰＝尊王攘夷派

文久２年（1862）の出来事

○孝明天皇の妹和宮と将軍家茂との結婚
○坂下門外の変で、老中安藤正信が失脚
○島津久光が、藩内の急進派を弾圧（寺田屋事件）

⇩

文久の改革（勅命により実施）
　一橋慶喜＝将軍後見職
　松平慶永＝政事総裁職
　松平容保＝京都守護職
翌年、将軍家茂・慶喜が上洛して幕権回復をはかる。
攘夷決行の期日を評決（期日は５月10日）。

蛤御門の変

幕末の京都
　尊攘急進派の公家が長州藩と結んで、朝廷の実権奪回を画策。

⇧

　会津・薩摩両藩は、公武合体派の公家と連携して尊攘派排撃の密議をおこなう。

⇩

　文久３年（1863）８月18日の政変
　長州藩・三条実美ら急進派を京都から追放

＊長州藩では、「正義派」と「俗論派」が対立。
＊因幡・備前・加賀藩では、長州への同情の動き。
＊水戸藩では、天狗党（水戸藩尊攘急進派）が挙兵。

⇩

元治元年（1864）6月5日、新選組隊士らが、京都守護職の兵士と共に、三条河原町の旅館に集結していた尊攘派志士を襲撃（池田屋事件）。

この事件を契機に、京都に遊撃隊が出兵。

⇩

7月19日、伏見（藤森）・蛤御門・堺町御門で戦端が開く。長州軍は各所で激戦を展開。しかし、宮門内外を警護する会津・桑名・薩摩などの藩兵に敗北。

京都焼亡

蛤御門の変＝軍事衝突は、この日のうちに決着。ところが、戦場となった京都では、戦火によって大きな被害をこうむる。火災は、三日後の21日の夕方6時頃になって、ようやく鎮火。

⇩

「今茲に元治元甲子年と云ふ七月十九日辰の剋と覚へし頃に、河原町二条下る所長州御屋敷より出火致し候へ共、すでに火勢もおだやかに相成候処に、俄に堺町御門より黒煙立ち上り候て、猛火四方にうちひろがり（中略）」

（『洛中大火夢物語』）

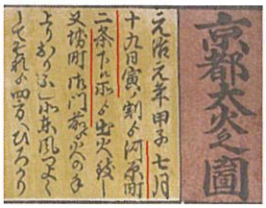
＊堺町御門の戦火
東は丸太町通から寺町通へ。
さらに、河原町から南へ四条通辺りへ類焼。
＊北辺は、蛤御門の戦火が中立売通へ。
さらに、室町通を南へ上長者町通まで。
西に広がった火の手は、新町通から出水通、釜座通から下立売通・椹木町通、西洞院通へ。
丸太町通の南西は、小川通・油小路通・東堀川通まで。南は七条を越えて木津屋橋通に至る。その東側は、鴨川まで一円焼失した。
町方811町、村方１ヵ所、家数27517軒、土蔵1316ヵ所、寺社塔頭253ヵ所、寺社境内建家155軒、諸侯屋敷40ヵ所、堂上方18ヵ所などが焼失。

蛤御門と堺町御門

あらためて「京都大火図」

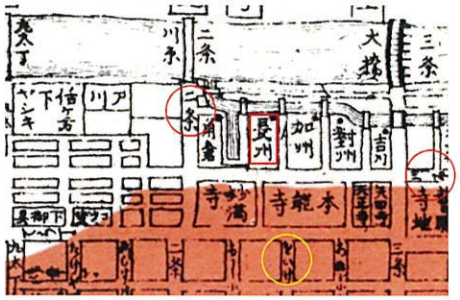
河原町二条下ル［　　］ヵ出火

瓦版の出火元情報

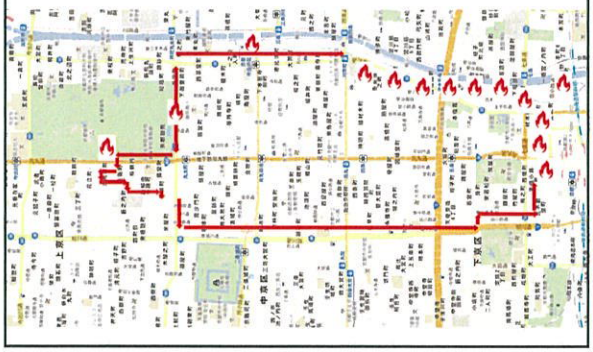


極本しらべ

「京都大火之略図」の「長州屋敷」



蛤御門の変による京都焼亡の様子



蛤御門の変と京都の人びと

「誠に此度の騒動は一方ならぬ大変にて、言語道断の事ども なり。いづれもみなみな手の舞足の踏所もわきまへず。親子兄弟は相互に先に呼後に答へて、東西南北へ逃迷ふ有様は目もあてられぬ次第に候（後略）」（『秋の日照』上）

「町人男女雑具つゞら持運び上を下へとかへし、大混雑ニ相成、其中ニ大筒鉄炮の打合有之。鎧武者の死人夥しく有之。京中之貴賤老若男女かまわす泣き叫ひ、東西南北ニ迷ひ廻り、誠に目もあてられぬ事共なり（後略）」（『若山要助日記』）

東本願寺の創立と京都

東本願寺は、慶長7年（1602）、退隠の身にあった第十二代の教如が、徳川家康から京都烏丸六条に寺地の寄進を受けたことに始まる。そののち、四度の焼失と再建をつうじて、幕府との結びつきを深めていった。

この頃の都市京都の景観は・・・

豊臣秀吉の京都改造
- 天正15（1587）年　聚楽第の造営
- 天正19（1591）年　御土居の築造

西本願寺の造営
- 天正19（1591）年　御影堂（大坂天満から京都西六条へ）
- 天正20（1592）年　阿弥陀堂

方広寺大仏殿の造営
- 文禄２（1593 ）年　上棟式（完成は文禄４年）

二条城の造営
- 慶長６（1601）年「二条御城、慶長七年之比迄ハ新御屋鋪」（『中井家文書』）
- 慶長８（1603）年「内府様、京新城始て御上洛」（『梵舜日記』）
  「公卿殿上人二條の御所に参向ありて、今度の宣下を賀せらる」（『東照宮御実紀』）
- 慶長16（1611）年「辰の刻、秀頼公入洛す。則ち家康公の御所二條え御越す」（『当代記』）

東本願寺造営の歴史

①慶長度造営［教如期］（東本願寺成立）
慶長７（1602）年～慶長 ９（1604）年
②明暦寛文度造営 ［宣如・琢如期］（親鸞四百回忌）
承応１（1652）年～寛文10（1670）年
③天明寛政度再建［乗如・達如期］（京都大火）Ⅰ
天明８（1788）年～享和 １（1801）年
④文政天保度再建［達如・厳如期］（山内出火）Ⅱ
文政６（1823）年～嘉永 １（1848）年
⑤安政度再建［厳如期］（京都大火）Ⅲ
安政５（1858）年～万延 １（1860）年
⑥明治度再建［厳如・現如期］（蛤御門の変による兵火）Ⅳ
元治１（1868）年～明治28（1895）年

国立歴史民俗博物館蔵（D本）

国立歴史民俗博物館（D本）

二条城と五条以南の東西両本願寺

蛤御門の変と東本願寺の対応

対応① 蛤御門の変による市街戦が始まると、東本願寺では「非常装束」を身につけた者が呼び集められて、町支配方の指示のもと、落武者の乱入を防ぐため寺内各所の門、及び境内北側の門の警衛にあたる。

役前何れも非常装束着用、早速菊之間え談示方罷出候処、昨今従上檀間、町支配松井外記御呼懸二面、上辺何分大変之様子二候故、何時落武者致乱入候哉も難計、依而御構御門々々、町支配并役前申合セ、相固メ居候様御沙汰二候間、町支配は烏丸より、南役前は諏訪町行当り御門より、御台所御門辺警衛可致様、松井ヨリ承之候二付、早速夫々其用意致候様手先え相達、非常道具なし人夫面已召連レ、右御門前二タ手二相備居候処、猶又烏丸通中立売辺出火二面、炮声弥以甚敷、火勢益盛ニ相成、火口都合五六箇所も相見、

『御作事日記』（元治元年七月十九日条）

対応② 夕刻前には、「常盤尊像」や法宝物類を山科御坊へと退避させるため下役が出張。午後六時頃に、前宗主の達如上人と厳如上人の一行が、本尊・御真影および残る宝物類と共に山科へ避難した。

常盤尊像、其外御宝物類御守護被為遊、大御所様、嘉枝宮様、若様方、山科御坊え御立退被仰出候二付、下役両三人、棟梁、大工、鳶方等、右御坊所え向ケ御先え出張、尚又酉刻頃二至り、御本尊を奉始、御真影并残る御宝物類御守護被為遊、両門様御歩行二面、同御坊所え御開き二相成、其後迚も炮声不相止、

『御作事日記』（元治元年七月十九日条）

対応③ 火勢は翌20日の朝も収まらず、この様子をみた御用番は、家老の浅井帯刀に伺いを立て、「御宮殿」「御厨子」「御霊殿」の金物類を取り外す。その後、因幡堂が焼失すると、火炎は勢いを増して東本願寺へ迫る。

消防方は五条通以南の町家を壊し、龍吐水を用いて鎮火に努めたが、午後四時頃、作事場に飛火した炎は、諸殿舎・仮両堂へと燃え広がり、境内地東側の枳殻邸へも延焼、寺内町のほとんどが灰燼に帰す。

翌朝ニ至り今以難致鎮火候間、御用番帯刀殿え再三相窺、御宮殿、御厨子、御霊殿御金物等悉く取除、（中略）暫時ニ因幡堂焼亡、段々下え焼来候故、此度ハ又夫々致手分、不明門通、烏丸、諏訪町、此三筋五条下ル人家を毀チ、龍吐水を以禦居候へ共、猛火弥烈敷相成、申刻前、其余焔御作事致飛候ニ付、其場を差置御台所え何れも馳付、上納所を毀チ粉骨砕身候得共、何分烈風ニ而、忽チ御台所え火移り難及人力、終ニ両御堂始、御座敷向、并枳殻御殿、其外御屋敷悉く灰燼と相成、誠ニ難ケ敷有様、

『御再建日記』（元治元年七月十九日条）

東本願寺の大玄関と大寝殿

大玄関と大寝殿は、蛤御門の変で焼失後、境内地に最初に再建された建物。慶応３年（1867）建造。
大寝殿は東本願寺の正殿として重要な儀式や法要に用いられる。

大玄関の式台外側には、花崗岩が「四半敷」に敷き詰められる。

敷石の中には、赤茶色のものが混ざり、兵火で焼損したものを再利用したと思われる。

むすびにかえて

蛤御門の変によって安政度再建の仮両堂・御霊殿をはじめ、枳殻邸の諸殿が焼失。幕末維新期の混乱した政治情勢の中で、その再建は困難を極めた。

境内地への仮両堂再建は、慶応２年（1866）からで、そののち立柱式・上棟式が挙行。８月18日に仮御影堂への遷座、25日に仮阿弥陀堂への遷仏が執行された。

慶応３年９月５日、第二十一代厳如が両堂再建を発示（「御書立」を披露）。だが、10月14日に大政奉還、12月９日に王政復古の大号令が出されて維新政府が樹立。その対応に負われることになり、造営事業は停滞して大幅に遅れることになった。